

A Review of the Literature on physical education learning as a subject: A critical examination from the perspective of understanding the content of subjects as the principles and concepts of physical education

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-01-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野津, 一浩, 齋藤, 剛 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00027855

教科としての体育学習に関する文献研究

—体育学習の教科内容を概念や法則と捉える視点からの批判的検討—

A Review of the Literature on physical education learning as a subject: A critical examination from the perspective of understanding the content of subjects as the principles and concepts of physical education

野津 一浩¹, 齋藤 剛²

Kazuhiro NOZU and Tsuyoshi SAITO

(令和2年11月30日受理)

ABSTRACT

Aim

Physical education learning that fosters the viewpoint and way of thinking about physical education is not always clear. Therefore, the purpose was to organize the research on physical education classes so far and to clarify how the principles and concepts that make up the framework of the subject content related to physical education learning have been interpreted.

Methods

In the domestic journal information database (CiNii) provided by the National Institute of Informatics, a keyword search was performed for "Physical education, class". We extracted 990 documents published from 2008 when the previous course of study was published to the present (September 7, 2020). From them, we selected and analyzed 134 papers on physical education class practice for elementary and junior high schools, which are compulsory education.

Before analysis, we classified the 134 selected papers into seven categories as follows. That is, "a treatise introducing lesson practice", "a treatise related to fun and motivation", "a treatise related to active learning", "a treatise related to lesson methods", "a treatise related to cross-curricular practice", "thesis related to the evaluation of lesson results", and "thesis related to the development of lesson programs and teaching materials". We analyzed and considered these classified papers from the viewpoint of "significance and effect of exercise, principle of exercise".

Result and Discussion

Although research was conducted from each viewpoint in each classification, no research was found that considered the subject content as the principles and concepts of physical education. In both studies, the exercise events were treated as the learning content of the subject.

¹保健体育教育系列

²静岡福祉大学子ども学部

Conclusions

There were few studies that considered the subject content a principle and a concept and pursued it as a concrete learning content. Therefore, it was not possible to clarify how the principles and concepts that make up the framework of the subject content were interpreted. There is an urgent need to make the principles and concepts necessary for the functioning of the viewpoints and ways of thinking of physical education into the learning content (subject content) of physical education.

1. はじめに

(1) 問題の所在

教科に位置づく体育科の存在意義は何なのか、すなわち、体育科で教え学ばせる教科内容は何なのかを問うことの必要性を唱える声が徐々に聞こえるようになってきている。その起点は、前回の学習指導要領に見出すことができる。小学校学習指導要領解説体育編(2008)¹⁾の体育科の内容には、「運動領域においては、発達段階のまとまりを考慮するとともに、基礎的な身体能力を身に付け、運動を豊かにしていくための基礎を培う観点から、発達の段階に応じた指導内容の明確化・体系化を図った。各学校においては、身に付けさせたい内容に向けて何を教える必要があるのかを整理し、学習を進めることが求められる」ことが示されている。また、中学校学習指導要領解説保健体育編(2008)²⁾には、教え学ばせる対象を「運動の特性とその特性に応じた行い方や運動をすることの意義と効果、運動の原則など」とおさえ、科学的に理解できるようにすることとしている。このようなことが求められるようになってきた背景を、今関ら³⁾は、それまでの体育科の内容では対応できないできごととして、目標に準拠した評価の導入、教えるべき最低基準とされた学習指導要領一部改正、読解力の課題の問題をあげ、体育科にとっての学習内容とは何なのかを明らかにしていくことが突きつけられはじめた経緯を説明している。また、教科内容を構成する枠組みとして概念や法則に依拠してこなかったことを指摘しており、運動種目を内容として捉えて展開してきた体育(運動)指導的な授業から、教科としての体育学習の本質に向き合うことへの大きな転換をせまられている状況があると言えよう。平成29年に発行された学習指導要領においては、体育の見方・考え方を働かせることができるようにすることを教科の目標の中核に据えている。このことによって、目指すべき方向性の転換の必要性をより一層明確に示したものと考えられる。

図1は、従来の体育科授業の考え方と改訂された学習指導要領の解釈に基づく体育の見方・考え方を育成していくための体育科授業の考え方を示したものである。

従来の体育科授業の考え方は、運動種目を内容と捉えてきたため、運動種目そのものが主たる目的となり、それぞれの運動種目に体育科の目標を紐付けるような形で授業を構想するような形が一般的であろう。しかしながら、運動種目に依拠する形での体育授業になるため、運動種目を教えること以上への発展の可能性という視点から見ると、種目を経験させること以上の深まりに及ぶことはあまりなかったと考えられる。運動種目の経験はしているが、何を学んだのかはあいまいな状態になっているのである。

これに対して、体育の見方・考え方を育成することを主たる目的とした体育科授業を構想していくということは、まずその体育科授業というものはどのようなものなのかを検討することが必要となる。それぞれの運動領域の内容を取り扱う前に、まず体育科の目標の解釈に基づく教科としての体育学習の枠組みを構築することが不可欠なのである。体育の見方・考え方を育

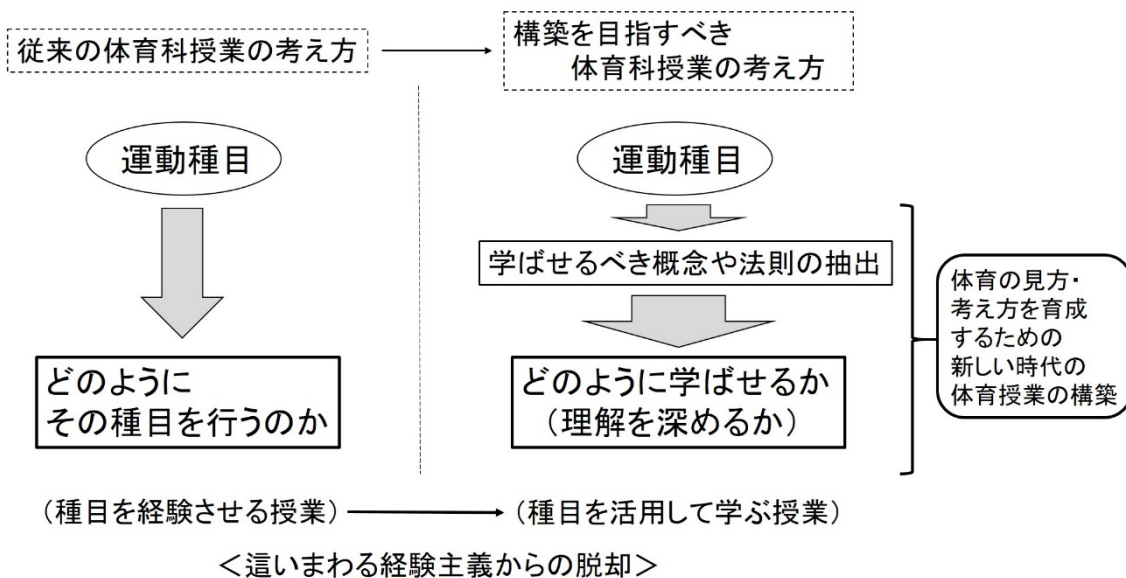


図1 体育（運動）指導的授業から教科としての体育学習への転換

成するという事は、考えるための根拠や理由となり得る概念や法則を教科内容と捉えなくてはならない。その理解を深めたり広げたりしていくことが、様々な見方・考え方を培っていくものとなると考えられるからである。このように捉えるならば、各運動種目に内在している概念や法則を教科内容の対象として抽出し、具体的な学習内容となり得るように位置づけることとなり、それらの理解を深めるための学習過程を構成するという学習構造が浮かび上がってくることとなる。これは、どの運動領域の種目を扱っても追究する直接の対象は運動種目に内在する概念や法則であり、教科としての体育学習の普遍的な枠組みを形成するということである。領域や種目ごとに追究する内容や追究する方法が変わっていくのではなく、領域や種目が変わったとしても、同じ形の学習を繰り返すこととなり、それが見方・考え方を育成していくための学習の積み重ねとなっていくと考えられる。このような教科として位置づけることの価値を説明できるようなアカデミックな学びを可能にする体育学習の構築を志向していかなければならないのである。

平成29年の学習指導要領の改訂において、体育科・保健体育科でも、「何ができるようになるか」（育成を目指す資質・能力）、「何を学ぶか」（教科を学ぶ意義と、教科等間・学校段階間のつながりを踏まえた教育課程の編成）、「どのように学ぶか」（各教科等の指導計画の作成と実施、学習・指導の改善・充実）が求められている⁴⁾⁵⁾。しかしながら、体育科改訂の趣旨における学習指導要領の成果と課題には、運動やスポーツが好きな児童生徒の割合が高まったこと、体力の低下傾向に歯止めが掛かったこと、スポーツとの多様な関わりの必要性や態度などの内容

が身に付いていること等の成果や、習得した知識及び技能を活用して課題解決すること、学習したことを分かりやすく伝えること、運動する子供とそうでない子供の二極化傾向が見られること等の課題があげられているものの、教え学ばせることの対象となる教科内容をどのように捉え、具体的にどのような内容を抽出してきたのか、ということについての振り返りが見られない。そのため、前回の学習指導要領が発行されてからこれまでに、「何ができるようになるか」「どのように学ぶか」の前提条件となる「何を学ぶか」の対象としての教科内容について具体的にどのような内容を抽出し研究が推し進められてきたのかを整理しておくことが必要と考えられる。そのため、それらの整理に基づいて、体育科・保健体育科の教科内容を構成する枠組みとしての概念や法則についての考え方をおさえ、体育の見方・考え方を育成する教科としての体育学習を構築していくための根拠を明確にすることを試みることにした。

(2) 研究の目的

平成20年の体育科・保健体育科の学習指導要領で示された、教え学ばせる対象としての「運動することの意義と効果、運動の原則など」を視座に、これまでの体育科・保健体育科の授業に関する研究において、具体的な学習内容としてどのようにおさえて位置づけられているのかを検討する。そして、体育科・保健体育科の教科内容の枠組みを構成する概念や法則をどのように捉えようとしてきたのかを整理することを目的とした。

2. 研究方法

本研究は、前回の学習指導要領が発行されてからこれまでに、体育科・保健体育科の教科内容をどのように理解して研究が進められてきたのかを明らかにする。この検討を行うに当たって、前回の学習指導要領が出された2008年から現在(2020年9月7日)までに発表された文献を対象とした。国立情報学研究所が提供する国内刊行雑誌情報データベース(CiNii)において、「体育科, 授業」でキーワード検索を行い、990件の文献が該当した。このうち、次の条件に従って著者らによる文献の抽出を行った。すなわち、学会発表の抄録など簡略された文献を除外した上で、義務教育である小学生および中学生を対象とした論文、体育の授業を直接扱った論文を抽出した。その結果、134本の文献が抽出された。本研究ではこの134本の文献を対象として分析することとした。

134本の文献について、それぞれの研究内容を読み取り、著者らによって研究の視点や方向性が類似しているものという観点からの分類を行った。

表1は、分析の対象とした体育授業に関する研究の分類を示したものである。

134本の文献は、「授業実践を紹介した論文」(50本)、「楽しさ、意欲に関連した論文」(25本)、「アクティブラーニングに関連した論文」(23本)、「授業の方法に関連した論文」(18本)、「教科横断的な実践に関連した論文」(7本)、「授業成果の評価に関連した論文」(6本)、「授業プログラム、教材の開発に関連した論文」(5本)の7つに分類された。

まず、その分類ごとのまとめりにおいて、具体的にどのような内容を学ばせる内容として位置づけているかの抽出を試みようとした。次に、抽出した内容の解釈を行うことを通して、何を教科内容の対象と捉えているかの分析を行おうとした。そして、運動種目に内在する運動に関する概念や法則との関連を考察することによって、体育科・保健体育科の教科内容の捉え方を整理していくことにした。

表1 分析の対象とした体育授業に関する研究の分類

分類	概要	文献番号
授業実践を紹介した論文	特定の種目の技術的な部分に着目した実践、武道（剣道、柔道）を効果的に行うための実践、指導の在り方に着目した実践、学習指導要領の改訂を意識した実践などを扱った論文	6)～55)
楽しさ、意欲に関連した論文	「できる喜び、楽しさ」を目指した授業実践、教師の言葉かけによる学習意欲の効果をみた実践研究、運動有能感を高めることを意図した授業実践などを扱った論文	56)～80)
アクティブラーニングに関連した論文	「主体的、対話的で深い学び」「協働的な学び」「思考力・判断力・表現力」「共同学習」などのキーワードを含み、アクティブラーニングを扱った論文	81)～103)
授業の方法に関連した論文	ICTを活用した授業改善、ジグソー法を用いた実践、プログラミング教材を取り入れた実践などを扱った論文	104)～121)
教科横断的な実践に関連した論文	体育科で国語科教材を活用した実践、体育科と生活科で連携した行われた実践、体育科と音楽科で連携した実践などを扱った論文	122)～128)
授業成果の評価に関連した論文	運動技能の評価に着目した実践、戦術・技術認識など授業によって認識がどのように変化したのか検討した実践などを扱った論文	129)～134)
授業プログラム、教材の開発に関連した論文	表現リズム遊びの授業開発に関する実践、なわとび運動における運動リズム、タクトの構成に関する実践、マット運動の教材開発に関する実践、授業に適した新たなスポーツ種目を創出した実践などを扱った論文	135)～139)

3. 結果ならびに考察

「授業実践を紹介した論文」においては、種々の運動について技能を効果的に伝えるための方法の提案、指導の在り方についての提案、学習指導要領に新たに加わった種目について実際に授業で試行したという実践報告など多様な授業実践が見られた。しかしながら、いずれもどのように伝達するのか、という方法論が主流であり、学ぶべき内容についての検討は見られなかった。

技能を効果的に伝えるための方法や指導の仕方の追究は、運動種目の行い方や取り組み方を指導しているものと捉えられた。これらのものは、運動種目を主眼とした体育（運動）指導的な授業であり、それらの運動種目を活用して概念や法則の理解を深めていくという視点が見当たらず、種目主義に陥っている状況を認識させられるものと考えられた。

「楽しさ、意欲に関連した論文」においては、技能習得に伴った「できる楽しさ、喜び」に焦点をあてて、効果的な授業形態や指導方法について検討している実践が多かった。それらの実践には、前回の学習指導要領にあった運動の意義、効果、原則の科学的理解を習得するというよりも、どのように運動に関する技能を習得するのかということに力点が置かれているように考えられた。

「できる楽しさや喜び」を追究すればするほど運動自体の専門性が高くなっていくため、学年段階があがるにつれてできる子が限定されていくこととなり、その楽しさや喜びを味わうことのできる子が着実に減少していく様相は容易に予想がつくはずである。また、運動種目に関する技能を習得することに力点が置かれているということは、運動種目そのものが目的になっているということである。教科体育を追究するならば、その運動種目を利用した学習を通して体育の見方・考え方を働かせるために必要な運動に関する概念や法則を追究し、その理解を深めていこうとするような視点が必要になると考えられる。

「アクティブラーニングに関連した論文」においては、現行の学習指導要領で注目された「どのように学ぶか」を具現化する試みがほとんどであった。「何を学ぶか」の知識・技能は重要であるという認識は記述されているが、論文の主たるテーマは「どのように学ぶか」であった。

どのように学ぶかの過程は重要なものであるが、教科の枠組みを構成する概念や法則を学習内容の対象と位置づけられない限り、運動種目にどのように取り組ませていくのかをねらいとした学習過程となろう。子どもたちは、何かの活動に取り組めば、それぞれ何かを思考しながら取り組むということは考えられる。しかしながら、種目そのものが目的であるため、種目にどのように取り組むのかということに関する思考が中心となり、様々な活動は行うものの種目の経験にとどまる。運動種目に内在している概念や原則を学ぶ内容として直接の対象としていないため、そのことを追究しようとする視点が生まれることはないと考えられる。

「授業の方法に関係した論文」においては、ICTの活用やジグソー法を用いた授業づくりなど、効果的、効率的に授業を進めるための方法について着目したものがほとんどであった。一方で、何をこの方法によって伝えるのか、という視点でこれらの論文を読み解くと、習得すべき内容としては、技能や戦術が第一義的なものであり、本研究のテーマである運動の原則などの科学的理解というものではなかった。

このグループに分類した研究においては、手立てを打つことによる効果を捉えるようなものが多く見られた。しかしながら、子どもたちが活動した様子や結果を整理しているにとどまっており、授業の手立てなどの方法が先立つと、その手立てに関わる活動を行うことが目的となってしまうことに陥りやすい傾向が捉えられた。例えば、知識として何を学ばせるのかという内容を明確に位置づけ、それに対する手立てを講じた結果その内容の理解がどのように深まったのかというような分析がなされることが、その方法の検証とならなければならないと考えられた。また、学ばせる内容というより、運動種目の技能を身に付けさせるということが目的となっているため、それらの方法はできるようにするための方法であり、教科内容としての運動に関する概念や法則を理解させるという視点が見られないことについては問題として追究される必要があると思われる。

「教科横断的な実践」においては、体育授業における言語活動の充実を目指した国語科との連携（学習カードの活用）や、「遊び」を扱う体育科と生活科、複数教科での連携した実践などがみられた。また、理科の授業デザインで示された問題把握的学習の考え方を保健体育科など他の教科において活かすような実践研究もみられた。他教科の考え方や教材を組み込んだの体育授業の実践は体育授業の在り方を考える上で有用であると思われるが、例えば、体育授業における言語活動は、話し合うような活動そのものに着目している傾向がみられるとともに、本研究の視点である運動の意義、効果、原則という教科内容として求めるべき内容を対象としていない現状がみられた。

本来、まずは各教科の枠組みにおいてその教科に特有の概念や法則を深く追究していくことを通して、その理解が深められていくことが必要である。その理解の深まりにともなって、他教科で理解の深められた概念や法則と関連づけられていくような学びが教科横断的な学びの本質と考えられる。しかしながら、活動の仕方が同じだから活用するというような内容が多く見られ、教科横断的な学びを表面的に捉えている実態が明らかとなる結果であった。

「授業成果の評価に関連した論文」においては、「わかって、できる」体育授業のために、技術や戦術の認識変容を児童の感想文から分析したものや、運動技能そのものの評価をテーマとした実践が見られた。「わかって、できる」の「わかって」の部分には、本研究のテーマの運動の原則というよりも、技術に限定的な知識のように考えられた。

認識に関する評価の観点のほとんどは、こうするとよいというような上手にできるようになるためのやり方がわかるというものであった。技術や戦術に関する概念や法則を学習内容としておさえるということは、その技術や戦術はどのようなもので、なぜそうするのか、どのような仕組みになっているのかを説明できるような理解を追究することと考えられる。それが、体育の見方・考え方を働かせるための根拠となっていくものと考えられるからである。しかしながら、どうするとうまくできるかの行い方がわかることや、どれだけできるようになったのかの技能の上達が評価の直接の対象になっている実態は、体育科の教科内容が運動種目そのものであるという認識から脱却することの困難性を感じさせるものであった。

「授業プログラム、教材の開発に関連した論文」においては、発達段階に適した学習プログラムの開発や、一般的に苦手だと捉えられている運動技能を習得しやすくするための教材の開発など、オリジナリティの高い実践が多かった。一方で、概念や法則に関して何を学ぶかの追究はなかった。

教材や学習プログラムは、教科内容を学びやすくするためのものと捉えるならば、子どもの思考を意図的に展開させていくことが求められる。しかしながら、教科内容が運動種目そのものとなっている状況からは、教材や学習プログラムを開発しているというより種目の練習プログラムを開発しているとの捉えの方が妥当のように考えられた。

4. まとめ

本研究は、平成20年の体育科・保健体育科の学習指導要領で示された、教え学ばせる対象としての「運動することの意義と効果、運動の原則など」を視座に、体育科・保健体育科の授業に関する研究において具体的な学習内容としてどのようにおさえて位置づけられてきたのかを

関連論文から検討し、教科内容の枠組みを構成する概念や法則をどのように捉えてきたのかを整理することが目的であった。

その結果、様々な視点から体育授業に関する研究が取り組まれているが、「運動をすることの意義と効果、運動の原則などについて科学的に理解する」ことに関連させた、教科内容を概念や法則として捉えようとした研究はほとんど見られなかった。そのため、その教科内容の枠組みを構成する概念や法則をどのように捉えてきたのかを整理することはできなかった。そのほとんどは運動種目そのものを目的にしたものであり、運動ができるようになることが学習の直接の対象と考えられている状況から変わっていないことを確認するものとなった。

運動種目を主たる目的としてそこに体育科の目標を紐付けて学習を仕組んだとしても、運動種目を教えること以上への発展を見込めるとは思われない。体育の見方・考え方を働かせるために必要な根拠となり得る概念や法則を教科内容として位置づけた体育学習の構築に向き合おうとすることが急務と考えられた。

参考文献

- 1) 文部科学省 (2008) 小学校学習指導要領解説体育編, 東洋館出版社.
- 2) 文部科学省 (2008) 中学校学習指導要領解説保健体育編, 東山書房.
- 3) 今関豊一・高橋健夫 (2013) 参考資料としての学習指導要領における体育科学習内容の位置づけに関する検討, 体育科教育学研究第 29 巻第 1 号, 1~22.
- 4) 文部科学省 (2017) 小学校学習指導要領解説体育編, 東洋館出版社.
- 5) 文部科学省 (2017) 中学校学習指導要領解説保健体育編, 東山書房.
- 6) 岸一弘 (2020) 小学 2 年生におけるシャトルを使った運動遊びとゲームの体育授業実践, 共愛学園前橋国際大学論集, 20, 147-168.
- 7) 池田延行 (2019) 日本のトップ選手への挑戦を意図した陸上運動の授業づくりの検討, 国士舘大学体育研究所報, 37, 43-46.
- 8) 白鳥晃紀 (2019) 「私たちのスポーツ」の視点でつくる小学校体育科授業ー「仲間とともにディスク・ショット」の授業実践を通してー, 愛知教育大学教育実践研究科 (教職大学院) 修了報告論集, 10, 21-30.
- 9) 福永哲也・神代博晋・毎床英樹・坂下玲子・大石康晴 (2019) 豊かなスポーツライフの実現をめざす授業の実践: バasketボールをしよう, 熊本大学教育実践研究, 36, 253-258.
- 10) 黒原貴仁・平谷まり (2018) 極小規模校における体育授業に関する一考察: 複式学級によるゴール型授業を通して, 南九州地域科学研究所報, 35, 11-17.
- 11) 小松恒誠・鈴木秀人・児島里菜・上野佳代・田島新・豊嶋祐也 (2018) 中学校の体育授業におけるラグビーに関する研究: 「オフサイド」の難しさに着目して, 東京学芸大学紀要. 芸術・スポーツ科学系, 70, 91-98.
- 12) 田口康之 (2018) 現・次期学習指導要領を踏まえた中学校の授業づくり, 国士舘大学体育研究所報, 36, 61-64.
- 13) 橋本大地・池田拓人 (2018) 中学校保健体育科における攻撃と防御の両方に戦術的課題を設けた剣道授業の有効性, 和歌山大学教職大学院紀要: 学校教育実践研究, 2, 103-112.
- 14) 西野明・下永田修二・佐藤道雄・七澤朱音・杉山英人・小宮山伴与志・坂本拓弥 (2018) 学校教育における自然体験活動の実践力育成を目指した授業内容の検討, 千葉大学教育学

- 部研究紀要, 66 (2), 153-156.
- 15) 大友智 (2018) ボール運動・球技系授業のこれまでとこれから, 体育科教育学研究, 34 (1), 51-57.
 - 16) 佐藤善人 (2018) 陸上運動・陸上競技の授業づくりの可能性, 体育科教育学研究, 34 (1), 44-50.
 - 17) 伊藤久仁 (2018) 体づくり運動授業のこれまでとこれから, 体育科教育学研究, 34 (1), 38-43.
 - 18) 岸一弘 (2018) 小学校体育科のバドミントンに関する授業づくり, 共愛学園前橋国際大学論集, 18, 173-188.
 - 19) 七澤朱音・佐藤道雄・小宮山伴与志・杉山英人・西野明・下永田修二 (2017) 体育実技・示範能力の向上を目指す「小学校体育」の授業実践, 千葉大学教育学部研究紀要, 66 (1), 433-438.
 - 20) 石坂友司 (2017) 武道必修化以後の剣道授業の展開に関する一考察: 奈良女子大学附属中等教育学校の授業を参観して, 教育システム研究 (奈良女子大学教育システム研究開発センター), 187-190.
 - 21) 大内淳也・成瀬九美 (2017) 「からだをマネジメントする授業」への視座: 中等教育学校前期課程3年生男子のバレーボール授業を介して, 教育システム研究 (奈良女子大学教育システム研究開発センター), 173-178.
 - 22) 中司みずほ・星野聡子 (2017) 攻防の面白さを楽しむ剣道の授業: 奈良女子大学附属中等教育学校1年女子体育科の授業検討, 教育システム研究 (奈良女子大学教育システム研究開発センター), 179-186.
 - 23) 久保賢太郎 (2017) ゲーム領域: はこべ!かわせ!タッチハンドボール (公開授業体育科4年3組), 研究紀要/東京学芸大学附属世田谷小学校, 49, 162-169.
 - 24) 畑野裕子 (2017) 体育科の学習指導内容と指導法に関する一考察: 中学校・高等学校のダンス授業における「新聞紙」を用いた実践報告を中心に, ジュニアスポーツ教育学科紀要, 5, 43-56.
 - 25) 橋本みゆき・板村邦弘・田島宏一・深澤祐美子 (2017) 保健体育科の目指す資質・能力: 生徒と教師でつくる体育授業のビジョン, 国際中等教育研究: 東京学芸大学附属国際中等教育学校研究紀要, 10, 77-96.
 - 26) 岸本強 (2016) 小学校体育科教育研究領域「ボール運動」におけるソフトバレーボールの授業研究, 島根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要, 56, 155-164.
 - 27) 梅垣明美・大友智・南島永衣子・上田憲嗣・深田直宏・吉井健人・宮尾夏姫 (2016): 中学生の体育授業を対象としたチームビルディング学習の開発とその有効性の検討, 体育科教育学研究, 32 (2), 1-18.
 - 28) 鈴木慶子・松平昭二・岡田雄樹・近藤智靖 (2016) 中学校体育における体づくり運動の体力を高める運動に焦点を当てた授業に関する事例的研究, 体育科教育学研究, 32 (1), 21-32
 - 29) 今井茂樹 (2015) 子どもの身体感覚を豊かに耕す体づくり運動の授業づくり: 第2学年「うごき作り名人になろう」の実践を通して (体育科), 東京学芸大学附属小金井小学校研究紀要, 37, 141-144.
 - 30) 瀧澤政彦 (2015) 所作礼法を重視した柔道授業の展開, 研究紀要/東京学芸大学附属高等学

- 校, 52, 43-51.
- 31) 萩原朋子 (2015) 仲間学習モデルの体育授業への適用過程とその成果, 体育科教育学研究, 31 (2), 42-48.
 - 32) 梅垣明美 (2015) 責任学習モデルの体育授業への適用過程とその成果, 体育科教育学研究, 31 (2), 56-61.
 - 33) 栗田昇平 (2015) 協同学習モデルの体育授業への適用過程とその成果, 体育科教育学研究, 31 (2), 49-55.
 - 34) 加納岳拓・岡野昇 (2014) 跳び箱を使った運動遊びにおける環境のデザインに関する研究, 三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, 34, 75-81.
 - 35) 石川恭・加藤玲香 (2013) 小学校体育科への伝承遊び導入について: 子どもたちの直面する様々な問題との関わりから, 愛知教育大学教育創造開発機構紀要, 3, 19-25.
 - 36) 西崎里織 (2013) 互いに認め合い支え合う「学級・授業」の創造—体育科教育での『言語力向上』を中心に—, 愛知教育大学教育実践研究科(教職大学院) 修了報告論集, 4, 91-100.
 - 37) 河口雅史 (2013) 体育科第1学年授業実践的当てあそび(ゲーム)(教科実践提案), 研究紀要/東京学芸大学附属大泉小学校, 24, 158-166.
 - 38) 阿久津千尋・伊藤章 (2013): 楽に3歩で走るインターバル条件でのハードル授業, 体育科教育学研究, 29 (2), 1-9.
 - 39) 松本格之祐 (2013) 小学校の器械運動(マット運動)の授業づくりにおける「指導と評価」の計画と具体, 体育科教育学研究, 29 (1), 67-72.
 - 40) 大塚光雄 (2013) 態度測定にみる短距離走の授業—学校段階, 性別, 好感度の違いが授業評価に与える影響—, 体育科教育学研究, 29 (1), 49-62.
 - 41) 松川真治・宮崎明世・岡出美則 (2013) ハードリングからインターバルランへのスムーズな移行に焦点をあてた小学校5年生の体育授業—「1歩ハードル」を教材に用いて—, 体育科教育学研究, 29 (1), 23-33.
 - 42) 野田義勝・堤公一・福本敏雄 (2013) 中学校における体育理論の授業づくりに関する一考察: 中学校3年保健体育科「体育理論」の授業を通して, 佐賀大学教育実践研究, 30, 173-181.
 - 43) 鬼澤陽子・小松崎敏・吉永武史・岡出美則・高橋健夫 (2012) バスケットボール3対2アウトナンバーゲームにおいて学習した状況判断力の3対3イーブンナンバーゲームへの適用可能性: 小学校高学年を対象とした体育授業におけるゲームパフォーマンスの分析を通して, 体育学研究, 57 (1), 59-69.
 - 44) 橋本晃和・本山貢 (2012) 体力テストの結果に基づいた初等体育科授業におけるボール運動「ゴール型」フラッグフットボールの実践について, 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要, 22, 41-48.
 - 45) 望月正・神谷紀行・黒柳哲也・赤田信一 (2012) 小学校体育科: 「的当てシュートゲーム」の授業における子どもたちが織り成す豊かな動きと学び, 静岡大学教育実践総合センター紀要, 20, 315-324.
 - 46) 嶽山由佳里 (2011) 第2章必修教科等の研究7保健体育生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の育成: 表現力を育む, 授業展開を目指して, 滋賀大学教育学部附属中学校研究紀要, 53, 105-111.
 - 47) 宮崎明世 (2011) 走運動を中心とした小中高一貫の陸上運動・陸上競技の授業づくり, 筑

波大学体育科学系紀要, 34, 159-162.

- 48) 藤木大三 (2011) 小学校課程におけるフラッグフットボール授業研究：特に、運動量を確保することを目的としたオフェンス部分練習方法について, 教育学論究, 3, 71-79.
- 49) 永浜明子 (2010) 体育科教育における障がいのある生徒の実技指導研究--那覇市 A 中学校の学校体育実践を通して, 大阪教育大学紀要第 5 部門教科教育, 58 (2), 43-56.
- 50) 安達光樹・鈴木秀人 (2010) 小学校の器械運動の授業における技の習得に関する研究：一運動形成の五位相とその識別方法に焦点を当てて一, 体育科教育学研究, 25 (1), 15-38.
- 51) 岩崎正義・城後豊・日下部未来・富川浩・高橋正年 (2009) バスケットボール授業に関する実践的研究 (2) 史実的視点による学習内容の構築, 北海道教育大学紀要教育科学編, 60 (1), 191-202.
- 52) 植屋清見・山田直弘・澤邊直人・小町昂史・比留間浩介 (2009) 本学初等体育科教育学の授業における走り高跳びの指導：ベリーロール及び背面跳びは小学生には危険な跳躍法かを通しての初等体育科教育学の授業の在り方を考える, 山梨大学教育人間科学部附属教育実践総合センター研究紀要, 14, 72-83.
- 53) 佐藤健太 (2009) 戦術学習に着目したバレーボール授業, 研究紀要/東京学芸大学附属高等学校, 46, 29-39.
- 54) 鬼澤陽子・小松崎敏・吉永武史・岡出美則・高橋健夫 (2008) 小学校 6 年生のバスケットボール授業における 3 対 2 アウトナンバーゲームと 3 対 3 イーブンナンバーゲームの比較--ゲーム中の状況判断力及びサポート行動に着目して, 体育学研究, 53 (2), 439-462.
- 55) 城後豊・岩崎正義・日下部未来 (2008) バスケットボール授業に関する実践的研究 (1) 「空間認識」の視点から, 北海道教育大学紀要教育科学編, 59 (1), 101-108.
- 56) 安武誠 (2020) 「夢中になって運動を楽しむことができる」保健体育科の授業づくり：陸上競技「短距離走・リレー」の授業取組を通して, 佐賀大学教育実践研究, 38, 97-104.
- 57) 笠井勇佑 (2020) 仲間とかかわる中で自分らしく輝き, 自己有用感を味わえる児童の育成—「認め合い活動」を重視した体育科の授業実践を通して—, 愛知教育大学教育実践研究科 (教職大学院) 修了報告論集, 11, 61-70.
- 58) 仲山正志 (2019) 体育科「できる楽しさを中心に据えた授業」実践：授業実践経年比較による授業改善の視, 甲南女子大学研究紀要, 56, 125-135.
- 59) 松本茂 (2019) 自ら学ぶ意欲を育む授業実践陸上競技 (ハードル走) の実践から, 中等教育研究紀要, 65, 75-79.
- 60) 岡崎奏斗・阿部隆幸 (2019) 教師の言葉かけが生徒の学習意欲に与える影響：中学校体育科の授業における言葉かけの内容に注目して, 上越教育大学教職大学院研究紀要, 6, 43-50.
- 61) 落合湧也 (2019) 全ての子が「できる喜び」を感じられる小学校体育科の授業づくり—ユニバーサル・デザインの視点を取り入れて—, 愛知教育大学教育実践研究科 (教職大学院) 修了報告論集, 10, 191-200.
- 62) 上田結香 (2018) どの子ども運動を好きになる体育科授業づくり—ゲーム中心で構成した指導の工夫とを通して—, 愛知教育大学教育実践研究科 (教職大学院) 修了報告論集, 9, 1-10.
- 63) 竹内康晃 (2017) 子どもたちが学び合いを意識する楽しい授業づくり—小学校の体育科の授業実践を中心に—, 愛知教育大学教育実践研究科 (教職大学院) 修了報告論集, 8, 191-200.
- 64) 石塚祥喜 (2017) 運動に親しむ子どもを育てる体育科の授業づくり—運動有能感を高める

- ための工夫を用いて一、愛知教育大学教育実践研究科(教職大学院)修了報告論集, 8, 11-20.
- 65) 仲山正志(2016) 体育科「できる楽しさを中心に据えた授業」実践: 小学校授業実践比較による授業改善の視点, 教育実践学研究, 19, 97-114.
- 66) 橋爪千尋(2016) 運動する楽しさを実感させる保健体育科授業—『わかる・できる・かかわる』を重視した活動を取り入れて一, 愛知教育大学教育実践研究科(教職大学院)修了報告論集, 7, 181-190.
- 67) 鈴置拓也(2016) 「わかる」「できる」喜びを実感できる小学校体育科授業づくり—学び合いの実践を通して一, 愛知教育大学教育実践研究科(教職大学院)修了報告論集, 7, 21-30.
- 68) 牧野将大(2016) 自らの成長を実感できる授業づくり—小学校の体育科の授業実践を中心に一, 愛知教育大学教育実践研究科(教職大学院)修了報告論集, 7, 231-240.
- 69) 林萌(2016) 自尊感情を高める保健体育科授業づくり—様々な視覚化を活用した学び合いを通して一, 愛知教育大学教育実践研究科(教職大学院)修了報告論集, 7, 191-200.
- 70) 工藤美波(2016) 小学校体育科における運動有能感をもたらす授業づくり, 山形大学大学院教育実践研究科年報, 7, 80-87.
- 71) 内田善弘(2016) 第2章必修教科等の研究7保健体育気づきを交流し, 動きを高め合う保健体育科学習の展開: 誰もが楽しく取り組む保健体育の授業を目指して, 滋賀大学教育学部附属中学校研究紀要, 56, 70-77.
- 72) 山本漱二郎(2015) ボール運動の楽しさを追求する体育科学習指導の研究—フラグフットボールでの場, 技, 存在の実感を通して一, 福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻(教職大学院)年報, 5, 127-134.
- 73) 高野友和(2014) 運動機能を軸にした「有能感」を高める小学校体育科授業—器械運動における教師のフィードバック行動を踏まえて一, 愛知教育大学教育実践研究科(教職大学院)修了報告論集, 5, 211-220.
- 74) 兼城雅也・山城友行・砂川力也(2013) 《保健体育科》主体的に運動やスポーツにかかわる生徒の育成: 「わかる」と「できる」が共感し合える授業づくりを通して, 研究紀要, 26, 97-110.
- 75) 近野巧(2013) 運動有能感を高める小学校体育科の授業づくり: 統制感と教師のフィードバック行動に着目して, 山形大学大学院教育実践研究科年報, 4, 74-81.
- 76) 近野巧(2011) 運動有能感を高める小学校体育科の授業づくり: 教師の言葉がけに着目して, 山形大学大学院教育実践研究科年報, 3, 242-245.
- 77) 佐藤知穂(2011) 「わかる」と「できる」の統一を目指した授業づくり: コーチングを活用した保健体育科の実践, 山形大学大学院教育実践研究科年報, 3, 100-107.
- 78) 大上輝明・大後戸一樹・山崎理恵・木原成一朗・村井潤(2011) 「わかる」こと的位置づけを明確にした体育科授業づくり: フラグフットボール教材における言語活動の充実を図る手立てに焦点を当てて(今日的な教育課題), 学部・附属学校共同研究紀要, 40, 129-134.
- 79) 高橋清孝・西野明(2010) 体育における学習意欲向上に関する実践的研究: 学習意欲向上プログラムの作成とその有効性の検討, 千葉体育学研究, 33, 11-21.
- 80) 松本大輔・細江文利・鈴木直樹・田中勝行(2009) 「授業の内からのアプローチ」による運動有能感: —ワークショップ形式の授業を手がかりにして一, 体育科教育学研究, 25(1), 1-13.

- 81) 徳永隆治 (2020) 「伝える力」を育て生かす体育科授業の事例的研究児童の発言から導かれる深い学び, 安田女子大学紀要, 48, 219-230.
- 82) 溝口仁志・橋本忠和・小松一保 (2020) 小学校体育科の対話的な学びと互恵的な協力関係との関連性についての一考察: 小学校第4学年器械運動「跳び箱パフォーマンス」を事例に, 北海道教育大学紀要.教育科学編, 70 (2), 357-372.
- 83) 田口康之 (2019) 平成29年度改訂学習指導要領を踏まえた中学校の授業づくり: 「主体的・対話的で深い学び」の実践的研究, 国士舘大学体育研究所報, 37, 53-55.
- 84) 山田淳子・林春香・辻延浩 (2019) 小学校体育科におけるアクティブ・ラーニング型授業の開発に関する研究: 第5学年の器械運動領域を対象として, 滋賀大学教育学部紀要, 68, 63-77.
- 85) 石黒雄三 (2019) 「思考・判断アプローチ」による授業づくりの提案—小学校中学年の体育科ボール運動の実践を通して—, 愛知教育大学教育実践研究科 (教職大学院) 修了報告論集, 10, 361-370.
- 86) 原田卓弥・鈴木貴之・戸花善紀・湯口雅史 (2019) 主体性の育成に根ざした体育授業の実践的研究: 小学校中学年のリレー学習における場の工夫に着目して, 鳴門教育大学学校教育研究紀要, 33, 95-102.
- 87) 森田哲史 (2018) 小学校における主体的・対話的で深い学びの実現に向けた体育授業, 体育科教育学研究, 35 (1), 27-32.
- 88) 徳永隆治 (2018) 体育科授業の今日的課題における「集団思考場面」の意義: 「主体的・対話的で深い学び」の授業づくり, 安田女子大学紀要, 46, 129-138.
- 89) 松井慎一 (2017) 体育・保健体育科におけるアクティブ・ラーニングの視点による授業改善: ベースボール型球技「ソフトボール」に着目して (体育研究所創立40周年記念号), 国士舘大学体育研究所報, 36, 65-69.
- 90) 西川潔 (2017) 主体的・対話的で深い学びを追究する授業に関する研究: 教育学科体育 (小学校) の授業を通して, 関西福祉科学大学紀要, 21, 61-72.
- 91) 鈴木雄大 (2017) 児童の主体的「学び」を目指した体育科授業づくり: 小学校1・2年生の実践を通して, 仙台大学大学院スポーツ科学研究科修士論文集, 18, 77-84.
- 92) 沖本由佳里 (2017) 第2章必修教科等の研究7保健体育生徒の主体的・協働的な学びを保障する保健体育科の授業づくり—アクション・リサーチ型プログラムの実践を通して—, 滋賀大学教育学部附属中学校研究紀要, 59, 74-81.
- 93) 湯浅理枝 (2017) 主体的・対話的で深い学びを目指したボール運動の授業づくり: 「空間的視点」に焦点を当てた二つのゴール型ゲームの実践を通して, 広島大学附属三原学校園研究紀要, 7, 126-133.
- 94) 松永光曜・倉田伸・篠崎信彦・呉屋博 (2017) 児童の課題発見・解決活動を促す動画比較を活用した授業実践, 教育実践総合センター紀要, 16, 357-367.
- 95) 向井光 (2017) 仲間の大切さに気づき, グループで協力することができる授業づくり—体育科の授業における協同学習を生かして—, 愛知教育大学教育実践研究科 (教職大学院) 修了報告論集, 8, 251-260.
- 96) 松井慎一 (2017) 体育・保健体育科におけるアクティブ・ラーニングの視点による授業改善: ベースボール型球技「ソフトボール」に着目して, 国士舘大学体育研究所報, 36, 65-69.

- 97) 大後戸一樹 (2017) 「思考力・判断力・表現力」からみた体育授業研究の実践の成果：小学校ボール運動の実践事例から，体育科教育学研究，33 (1)，43-48.
- 98) 東海林沙貴・友添秀則・吉永武史 (2017) 小学校の体育授業における協同学習モデルの成果に関する研究：—ジグソーJPE を適用した児童同士の関わり合いを促す授業実践を通じた検討—，体育科教育学研究，33 (1)，1-18.
- 99) 原辰徳・坂下玲子・坂本将基 (2016) 中学校保健体育科における協同学習の効果に関する研究：1年生女子の球技（バレーボール）の授業を対象として，熊本大学教育学部紀要，66，199-206.
- 100) 沖本由佳里 (2016) 第2章必修教科等の研究7保健体育思考力・判断力・表現力の育成を目指した保健体育科の授業開発—ダンス領域における「よい動き」の可視化と自己表現力の向上を目指して—，滋賀大学教育学部附属中学校研究紀要，58，78-83.
- 101) 出未淳一郎・福元浩子・西山修平 (2016) 明日をたくましく生き抜く思考力・判断力・表現力を育成する体育科授業の創造：「思考スキル」を活用し，主体的に学びを深める授業，鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要，26，479-486.
- 102) 直井清貴・上野佳代・直井清貴 (2015) 課題意識をもち，主体的に取り組む生徒の育成：中学校保健体育科（体育分野）「武道（柔道）」の授業実践（主題研究：保健体育科（体育分野）），研究紀要/東京学芸大学附属小金井中学校，51，101-108.
- 103) 笠松具晃 (2015) 子どもが主体的に取り組む「体づくり運動」の授業：第6学年「It'saSUMOUworld」の実践を通して（体育科），東京学芸大学教育学部附属小金井小学校研究紀要，37，145-148.
- 104) 神野周太郎 (2020) 体育における水泳授業の「導入」に関する一考察—プラグマティック教育理論に基づく体育科教育方法論の展開—，長崎国際大学教育基盤センター紀要，3，25-34
- 105) 石井悦夫 (2020) ジグソーメソッドによる保健体育科の授業づくり，神奈川大学心理・教育研究論集，47，255-270.
- 106) 梅原拓哉・藤谷哲・雪吹誠 (2019) 学習者によるタブレット端末のビデオ機能の活用が体育科授業で果たす役割（ICTを用いた学習環境の構築/一般），日本教育工学会研究報告集，19 (1)，179-184.
- 107) 仲本啓太郎・島田功 (2018) 算数科教育の空間観念に於ける視点に関する研究：サッカー場面に於ける活用に着目して，日本体育大学大学院教育学研究科紀要，2 (1)，99-119.
- 108) 河合史菜・久保田もか・山内正毅・高橋浩二・峰松和夫・高野友一・橋田晶拓・丸山博文・溝上元・森小夜子 (2018) 体育科・保健体育科におけるICT活用の検討：附属小学校・中学校の授業事例から，長崎大学教育学部教育実践研究紀要，17，13-19.
- 109) 松田昌幸・岡端隆 (2018) 他者動感画の活用が動感形成に与える影響：—中学校保健体育科における器械運動の授業を通して—，スポーツ運動学研究，30，123-139.
- 110) 水内豊和・青山真紀・山西潤一 (2018) 知的障害児の体育科「立ち幅跳び」指導におけるICT活用の有効性，教育情報研究，33 (3)，15-20.
- 111) 外山良史・丸山悟・橋爪智哲・水落芳明 (2018) 学習者によるタブレット型端末の活用方法の選択に関する事例的研究，日本科学教育学会研究会研究報告，28 (3)，5-8.
- 112) 久保田もか・高橋浩二・河合史菜・山内正毅・峰松和夫・橋田晶拓・高野友一 (2018) な

- わとび運動に生かす運動リズムとタクトの構成：小学校体育科における体づくり運動領域の授業実践から，長崎大学教育学部教育実践研究紀要，17，1-6.
- 113) 齊藤勝・河村明和（2017）初等教育における ICT を活用した授業改善：協働学習を取り入れた体育科の実践から，学級経営心理学研究，6（2），174-182.
- 114) 本間忠明（2016）めあてをもって学び合う力を身に付ける体育学習の在り方に関する研究：小学校体育科体づくり運動領域におけるジグソー法を用いた実践を通して，創大教育研究 26，115-133.
- 115) 笠松具晃（2016）ICT を評価に活用した授業実践：第4学年「ソフトバレーボール」の実践を通して（体育科），東京学芸大学教育学部附属小金井小学校研究紀要，38，149-152.
- 116) 山室勇二（2016）保健体育科におけるタブレットパソコンを用いた授業実践—映像比較による主体的な課題解決学習への試み—，福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻（教職大学院）年報，6，87-94.
- 117) 高根信吾・三澤宏次・新保淳（2015）小学校体育科における児童の学習効果向上および教員の授業実践力熟達化に寄与する iPad の使用法に関する研究：4年生の「走り高跳び」を事例として，常葉大学経営学部紀要，3（1），83-89.
- 118) 野田義勝・堤公一・福本敏雄（2013）体育学習における学習カードの効果とその活用法：中学校2年保健体育科「器械体操」の授業を通して，佐賀大学教育実践研究，29，237-246.
- 119) 小畑治・岡澤祥訓・石川元美（2011）小学校体育科における器械運動の『技の配列表』作成の試み：鉄棒運動及びマット運動について，教育実践開発研究センター研究紀要奈良教育大学教育実践開発研究センター，21，239-244.
- 120) 福ヶ迫善彦・高田大輔（2012）体育授業における「学習の勢い」を生み出す指導方略及び指導技術の妥当性の検証：—小学校高学年「ゴール型」ボール運動の介入実験授業を通して—，スポーツ教育学研究，日本スポーツ教育学会，32（1），33-54.
- 121) 前田曜子（2008）映像資料を活用したダンスの授業，研究紀要/東京学芸大学附属高等学校，45，31-40.
- 122) 豊永洵子（2019）小学校体育科における教科横断的な授業づくり：体育科「表現あそび」における国語科教材の活用，児童教育論集，3，22-29.
- 123) 渡辺圭（2017）体育科と生活科を中心とした合科的・関連的な授業実践：「にんじゃ」がつなぐ子どもの学び，和歌山大学教育学部附属小学校紀要，40，118-123.
- 124) 中島寿宏・木本理可・高瀬淳也（2017）体育授業における子どもの課題発見を促す教科横断型授業の効果：学習カードの統一による国語科と体育科の接続，北海道体育学研究，52，9-20.
- 125) 鈴木一成・渡辺行野・大熊誠二（2016）教科横断的な視点における共通感覚的学習の実践的検討，東洋大学文学部紀要教育学科編，43，51-58.
- 126) 鈴木一成・森頭子・渡邊智紀・渡辺行野・大熊誠二（2015）教科横断的な視点における問題把握の学習の実践的検討，研究紀要/東京学芸大学附属竹早中学校，53，31-39.
- 127) 鈴木一成・渡邊智紀・渡辺行野・大熊誠二（2013）「思考力・判断力・表現力」育成に寄与する学習活動における教科横断的な視点に関する研究，研究紀要/東京学芸大学附属竹早中学校，52，27-35.
- 128) 森下修次・滝澤かほる・印銀清佳（2008）特別支援学校中学部における音楽と動きによる

表現の開発--音楽科と体育科の連携による音楽の授業, 新潟大学教育人間科学部紀要人文・社会科学編, 10 (2), 123-126.

- 129) 玉腰和典 (2018) 小学校体育授業における戦術・技術認識の形成過程に関する事例研究: 一認識対象の変容過程に着目した感想文分析を通して一, 体育科教育学研究, 34 (1), 17-30.
- 130) 稲垣良介・岸俊行 (2014) 着衣泳が小学生の水難事故に対するリスク認識と対策実行認識に及ぼす影響: 一救命胴衣を用いた授業を実践して一, 体育科教育学研究, 30 (2), 25-36.
- 131) 中西紘士・梅野栄治・湯浅理枝・奥川和永・坂田行平・八反田耕士・埴本美紀・大後戸一樹・木原成一郎 (2014) 体育科授業における技能の獲得や気付きの変容について: 跳び箱運動「台上前転」に焦点を当てて, 学部・附属学校共同研究紀要, 43, 69-77.
- 132) 加登本仁・大後戸一樹・木原成一郎 (2014) 小学校体育科のボール運動の授業における学習集団の形成過程に関する事例研究: エンゲストロームの活動理論を手がかりとして, 教育方法学研究, 39, 83-94.
- 133) 大後戸一樹・木原成一郎・加登本仁 (2010) 小学校の体育授業における児童の運動技能の評価に関する実践的研究: 一教師による評価と児童の自己評価および相互評価に着目して一, 体育科教育学研究, 25 (2), 1-14.
- 134) 久保研二・木原成一郎・大後戸一樹 (2008) 小学校体育科授業における「省察」の変容についての一考察, 体育学研究, 53 (1), 159-171.
- 135) 栗塚祐二 (2016) 小学校6年生の体育科(マット運動)における後転の教材開発<実践報告>, 初等教育カリキュラム研究, 4, 85-94.
- 136) 松本祐介・宮崎明世・三木ひろみ・岡出美則 (2013) 小学校低学年の体育授業における捕球技能の習得: 一捕球動作の選択の学習とその効果一, スポーツ教育学研究日本スポーツ教育学会, 33 (2), 1-13.
- 137) 陳洋明・池田延行 (2014) 小学校中学年における幅跳びの学習指導に関する一考察: 一3年生と4年生の授業成果の比較を通して一, 体育科教育学研究, 30 (1), 17-32.
- 138) 赤田信一・赤田陽子 (2010) 小学校体育科:「表現リズム遊び」についての授業開発の試み, 静岡大学教育実践総合センター紀要, 18, 31-38.
- 139) 岡田雄樹・末永祐介・近藤智靖 (2015) 小学校3年生の体育授業における「オールコートスリーサークル」の有効性に関する事例的研究, 体育科教育学研究, 31 (1), 29-41.